



フォーレ四重奏団 (2021.12.9) © 大窪道治

TOPPANホール開館25周年 室内楽、往古来今～これまでも、これからも

〔特別寄稿〕

魂のこもった音楽ホール 中村孝義

大曲がりの先に開かれた殿堂 片山杜秀

銀の煙管——あるいは“古楽”のユートピアについて 澤谷夏樹

〔Schedule 2025.8～12〕

〔Information〕

〔Review〕ベルチャ・クアルテット&エベーヌ弦楽四重奏団

フライブルク・バロック・オーケストラ&クリスティアン・ベザイデンホウト

世界屈指の凄腕に熱狂した濃密なひととき 鈴木淳史

ランチタイムコンサート Vol.135 戸澤采紀 (ヴァイオリン)

読響アンサンブル・シリーズ

25th
TOPPAN HALL
since 2000

室内楽、往古来今 感性に響く世界を、これまでも、

識者からみたホールのあゆみ～開館25周

魂のこもった音楽ホール

中村孝義

ちょっと驚かれるような比喻になるかもしれないが、音楽ホールというものは仏像と相似たところがある。それらは魂が込められなければ、前者はいくら見場や響きが良かったとしても単なる伽藍洞に過ぎず、後者はたとえ美術品のな価値はあったとしても、所詮は単なる木偶に過ぎない。それらは魂が込められてこそ初めて真に意味を成すものとなるからだ。

わが国には、一時期の建設ラッシュによって、全国津々浦々に二千近くものホールが存在する。しかしその少ないものが、残念なことにかに伽藍洞と化してしまっていることか。つまり音楽ホールに魂を込めるのは生易しいことではないのである。開場した時にいくら盛大に記念公演を打ったとしても、それだけではホールに魂は込められない。それは底知れない栄養分を吸収せねば生きていけない生きものであるかのように、倦まず弛まず栄養を与え続けねばならない。でなければ魂の抜けた生ける屍のような状態に陥ってしまう。

どんな栄養を与えねばならないのか。多くの聴衆が、どうしてもそこに聴きにいきたくなるような企画を立て、それを万全の演奏家によって実現し続けるということ。しかしそれは、単に聴衆に来てもらいたいがために、聴衆におもねるような迎合的なものということではない。つまり人が集まるからといって、いつも似たり寄ったりの、あるいは決まりきったプログラムで演奏会を行うなどと言うことでは到底ない。むしろ多少お客さんが二の足を踏むようなものであっても、それを実践することにより、将来に向かって明らかに音楽や音楽家やそれを聴く人々に充実した人生や未来をもたらし可能性のあるもの。算盤に合わないということがたとえ分かったとしても、それが意義深いものであれば、何とかそれを克服して実現されたもの。もちろん経済的なことも大切だが、何のために音楽をするのかという明確な使命感とそれを達成するための高い志をもってそれに取り組んでいるという姿勢がプログラムや音楽家の人選に沁み込んでいるもの。どれも言うは易し、行うは難しなものばかりだ。しかしそうしたことをやらねば、ホールとい

うものは魂のこもらない抜け殻になってしまう。

そしてこうしたことを設立以来倦まず弛まず行ってきたのが、まさにTOPPANホールというホールとそこで働く人たちだ。このホールが設立25周年を迎えたということは、わが国の音楽界にとって何と慶賀すべきことだろう。TOPPANホールのプログラムや、その意図、登用された音楽家を眺めていると、本当に溜飲の下がる思いをすることが少なくないが、同時にそれを支持する聴衆の存在は、まだまだ日本も捨てたものではないと思わせてくれる。ホールに魂を吹き込み、そこに集う人たちに、音楽という芸術を通して生きる力を与えてくれるホールが、今後も末永くその存在感を示し続けてくれることを心から願ってやまない。

先ごろ発表された2025/26シーズンのプログラムも、どれを見てもまさに今まで述べてきたことを実践する好個の例で、フォーレ四重奏団が中核をなす室内楽フェスティバルも、ペヌティエやゲルシュタイン、フェルナー、カプソン、アルトシュテットなどの常連演奏家によるどれもが聴き逃がせないものばかり。なかでも敢えて私は、これが彼らの活動のフィナーレになると告知されているハーゲン・クアルテットの5夜にわたるシリーズと、ベルリン古楽アカデミーやイル・ジャルディーノ・アルモニコの古楽演奏に注目したいと思う。前者は、弦楽四重奏にとって奇跡の空間ともいべきTOPPANホールをフィナーレの場にしたハーゲン・クアルテットが、長年第一線で活躍してきた四重奏芸術の粋をどのような演奏で飾ってくれるか、また後者では、古楽にとってわが国で最も優れた音空間であると断言してはばからないTOPPANホールでしか味わえない、本物のピリオド楽器演奏を聴く真の喜びを味わえるのではないかと、今から気持ちが高鳴るのをおさえることができない。

なかむら・たかよし／音楽学者、音楽評論家
関西学院大学大学院博士課程単位取得満期退学。ドイツ、ヴェルツブルク大学客員研究員、大阪音楽大学教授、学長、理事長などを経て、現在は名誉教授。著書に「室内楽の歴史」(東京書籍・ミュージックペンクラブ新人賞受賞)、「ベートーヴェン 器楽・室内楽の宇宙」(春秋社)など。

大曲がりの先に開かれた

TOPPANホールに行こうとする。飯田橋の駅からだと、目白通りを進んで、大曲交差点のところを大きく西に曲がる。神田川の流れがそのように大曲がりしていて、道がリ川をなぞっているからなのだが、とにかく直角に曲がるくらいに大曲がりしてさらに進むとじきに、TOPPANホールや印刷博物館の入るTOPPAN本社の曲線美に富んだ建物が見えてくる。そうやって大きく曲がるとTOPPANホールにたどり着くわけだ。やはりそこに象徴的意味がある。勝手にそう思っている。

TOPPANのかつての社名は凸版印刷。凸凹と書いてデコボコと読む。凸版の凸はトツでありデコだ。印刷は凹凸の形状を用いて紙にインクを押しつけるからTOPPANが社名にもなるのだが、そこにあるホールはどうか。ホール主催でクラシック音楽をやっている。しかも室内楽や器楽、歌曲に比重がある。クラシック音楽と言えばオペラや交響楽もあるし、そちらの方が一般的には、たくさんの聴衆を集められるのだろうが、そもそもオペラや交響楽はどこまでクラシック音楽なのだろう？ たえば祝典交響曲や葬送カンタータや慶事を寿ぐ大歌劇というものはたくさん存在する。国家や社会をまとめて束ねる機能がオペラや交響楽には期待される。だから多くの国に国立歌劇場や国立交響楽団や国営放送局の管弦楽団がある。では国立弦楽四重奏団はあるだろうか。冷戦時代の社会主義国にはあった。他にもあろう。でも今も普通にある形態ではないだろう。弦楽四重奏団とはかなりの場合、やりたい人が勝手にやっているものだろう。大勢の人々に支えられているにしても自主独立の存在だろう。ましてやリート歌手においてをや。

あとはクラシック音楽の定義の問題だ。オペラや交響楽はクラシック音楽の花形には違いない。しかしベートーヴェン以来、交響曲は不特定多数に向かって大言壮語する分野になったのだ。オペラはバリやウィーンで儀礼や社交の随伴物として育てられたのだ。さらにジャズやロックや歌謡曲を取り込んだ交響楽もオペラも容易に想像できるし、現にある。交響楽やオペラはクラシック音楽でありながら、そこからはみ出すことで生き残ってゆく。巨大さを渴望す





これからも――

年に寄せて 各世代からメッセージをいただきました

殿堂 片山杜秀

るので力と結びつきやすい。権力と言ってもよい。だいたい歌劇場でも交響楽団でも指揮者が目立つように出来ている。指揮者は一種の権力者だ。交響楽やオペラが権力から逃れ得ないひとつの証しだ。そんな展望を得てしまったとき、クラシック音楽を愛する者はどう振る舞うだろうか。花形と思われがちな大規模かつ壮麗な街道筋から曲がつてみたくなる人がいるかもしれない。大曲がりしてみたくなる。江戸の人々が生きてゆくために求めて流した神田上水という水道に沿って曲がると、そこにTOPPANホールがある。演歌の歌詞ではないけれど、人生は凸凹道なのだ。クラシック音楽のポリフォニーの技術は、パレストリーナまで、さらに下ってバッハまでは、神の秩序を表現すべく利用されたが、ハイドン、モーツァルトを経て、ベートーヴェン、そしてシューベルトで、豊富な和声法を伴って、人生の凸凹道を表現するためのものに置き換えられた。とはいえ、それは大編成の交響楽的音楽では多彩な音色や猛烈な音量によってデコレートされすぎてしまう。そうならずにありのままの凸凹道を旅して彷徨うさまを感得させるのは、弦楽四重奏やピアノ三重奏等に他ならない。人々をあまねく孤独や苦悩という名の凸凹道の旅人にした19世紀以降の市民社会の似姿として、室内楽は発展した。歌詞を伴うその種の表現としては特にはドイツ・リートだ。あくまで人が個人として、集合的な巨大な力に飲み込まれず、真摯に生きてゆくための芸術的教養、ないしは芸術的教養を与えるものがクラシック音楽だという古典的定義にしたがえば、その真の王道は、大ホール向けのオペラや交響楽でなく、断じて小ホール向けの室内楽や歌曲である。その分野の魅力を敢然と表現し続けてきたのがTOPPANホールなのだ。25周年、おめでとうございます。

かたやま・もりひで／評論家
2008年『音盤考現学』『音盤博物誌』で吉田秀和賞、サントリー学芸賞受賞。2012年『未完のファシズム』で司馬遼太郎賞受賞。『平成精神史』等、著書多数。NHK-FM「クラシックの迷宮」パーソナリティ。2024年水戸芸術館館長に就任。慶應義塾大学法学部教授。

開館25周年の大きな節目にあたっては、「これまでの総括・結実＋未来への展望・橋渡し」を企画のテーマに据えました。
開幕を託したのは、フォーレ四重奏団。初登場以来私たちのポリシーに共感し、いつも忘れ難いステージで感動させてくれる同志のような存在です。今回はメンバーの傑出した個性を感じていただくべく彼らを解体し、個々がさまざまな編成で国内外の精鋭と躍動する室内楽パートと、彼らの近年の音楽仲間でもあるアネット・ダッシュ（Sop）との歌曲パートをご用意しました。即興性と遊び心にあふれる、室内楽の醍醐味を味わい尽くせるフェスティバル。13年ぶり、待望のダッシュも楽しみます。
“弦のTOPPAN”を自負するホールとして、記念年の弦もめかりはありません。欧州最先端の古楽アンサンブル、ベルリン古楽アカデミー。今やスーパースターのゴートイエ・カプソン（vc）。彼の日本初リサイタルはTOPPANでした。昨年末の鮮烈なステージが記憶に新しいアントニーニ（Cond）&イル・ジャルディーノ・アルモニコは、異才アンナ・プロハスカ（Sop）とともに早くも再登場。阿吽の呼吸で創り出す“大人の音楽”が味わい深い、トリオ・ヴァンダラー。清新さと驚異のテクニクが持ち味のレオンコロ弦楽四重奏団に、日本期待の北村陽（vc）。ベテランと若手の聴き比べも一興です。シーズン後半の軸になる、ニコラ・アルトシュテット（vc）を中心とした2夜もこだわりが満載。彼と何度も協議を重ね、歴史的背景や社会性を孕んだ作品を通して知的好奇心を満たすプログラムを仕上げました。イリア・グリーンゴルツ（vn）、ヨナス・アホネン（pf）ら異才が集い、化学反応が楽しみです。
ピアノの筆頭は、思わぬ怪我から驚異の回復力で復活したジャン＝クロード・ペヌティエ。さらに、絶大な人気を誇る藤田真央とキリル・ゲルシュタインの夢の師弟

デュオ。近年後進の育成にも力を注ぎ、演奏家として一層魅力が増すティル・フェルナーは“日本の若手と共演したい”というリクエストを受け、Trio Rizzle、郷古廉（vn）との室内楽を実現。ホールの音響を知り尽くす、主催常連の競演が楽しみです。そして、3月の記者発表で大きな反響をいただいた、ベーゼンドルファー・ジャパン様よりお借り受ける「1909年製ベーゼンドルファー Model 250」によるコンサート。〈ニューイヤー〉では、世界の音楽の中心、ウィーン国立歌劇場で時代の変遷を潜り抜けてきたこの楽器の特性が存分に生きる作品を並べて、その腹郁たる響きをたっぷりお楽しみいただきます。ほか、ランチタイムコンサート等でもこの楽器による企画を計画中です。
そして最後に、2025/26シーズンでの解散を表明したハーゲン・クアルテット。20年にわたるTOPPANホールとの歩み、育まれた深い信頼と絆は私たちの宝物です。最終プロジェクトの今回は、2015年公演での共演を機にイェルク・ヴィトマン（cl）が作曲した《クラリネット五重奏曲》日本初演を含む全5公演を開催。「キャリア最後のステージはTOPPANホールで…」と、彼らが願ってくれたことを記しつつ、〈ハーゲン プロジェクト〉のフィナーレをみなさまに見届けていただけたら、これ以上の喜びはありません。ヴィトマンは、彼を中心に展開する室内楽公演にも出演します。
開館から四半世紀を経てなお、私たちは妥協せず、音楽の深淵を追求し続けています。共感してくださるアーティスト、お客さまと手を携え、これからもその、終わりになき旅路を歩んで行きたいと願っています。（談）

プログラミング・ディレクター 西巻正史

銀の煙管――あるいは “古楽”のユートピアについて 澤谷夏樹

煙管を持つ人も少なくなった。金属製の口元（吸い口）と雁首（火皿）を、竹や木でできた羅^ラ宇（管）でつなぐ、あの喫煙具である。だから、これから話す冗談もいささか通じにくくなっているかもしれない。それでも、この喩えがやはりしっくりくる。古楽好きは現代音楽好きであることが多い。こうした音楽愛好家を昔から「煙管ファン」と呼ぶ。音楽史の元（古楽）と先（現代音楽）にしか“カネ”を使わないからだ。

古楽は作曲当時の楽器や演奏法を大切にすることで、音楽にこびりついた手垢を落とし、作品を今まさに生まれたかのように生き活きと響かせることに力を注ぐ。演奏者が作曲家と時代精神を共有しようとする点で、古楽と現代音楽のオペレーションはとても似通っている。

TOPPANホールはそんな「煙管ファン」にとって、四半世紀にわたリユートピアであり続けた。過去の楽園の風景はいまだに心に刻まれている。ジュリアーノ・カルミニョーラ（ヴァイオリン）と矢野泰世（フォルテピアノ）によるモーツァルト（2012年）、アンドレアス・シュタイアー（フォルテピアノ）によるベートーヴェンの《ディアベリ変奏曲》（2013年）。『ヴェネツィアの休日』と題して、その実、バッハのイタリア体験の衝撃を描いたベルリン古楽アカデミーの演奏会（2016年）も忘れがたい。

とりわけ「煙管」的視座を持ったコンサートは深い興趣を感じさせる。たとえば、2014年のヴォルフラム・クリスト（ヴィオラ、ヴィオラ・ダモーレ）と佐藤卓史（ピアノ、フォルテピアノ）の共演。16世紀のダウランドから20世紀のブリテンへと即座になだれ込み、両者の思わぬ響き合いを現前させた。

ダウランドで思い出すのはピーター・ゼルキン（ピアノ）の演奏だ（2015年）。16世紀のダウランド、18世紀のバッハ、19世紀のベートーヴェン、20世紀のレーガーらがプログラムに同居する。どこかミサ曲を思わせるコンサートの運びにも唸らされた。

その意味では、アレクサンドル・タロー（ピアノ）による演奏会もすばらしい（2018年）。クーブラン、シャブリエ、ドビュッシー、

ラヴェルの作品でクラヴサン音楽の系譜を明らかにする。演奏のどこを切ってもフランス語の台詞が聞こえてきた。

アレクサンドル・メルニコフが2021年、バッハからシュニトケまでの口跡の違いを、チェンバロ、2台のフォルテピアノ、モダンピアノで弾き分けたコンサートも傑作だ。各時代の語法を、4台の楽器から肅々と引き出す奏者のストイックさに打たれた。

こうしてみるとTOPPANホールでは、鉄でできていたはずの煙管の口元と雁首が、いつのまにか純銀になって輝いている。ユートピアたるゆえんはここにある。『煙管ファン』の趣味の“資産価値”が上がるのだ。

その輝きは2025/26シーズンも保たれる。25年11月には、作曲家でありクラリネット奏者でもあるイェルク・ヴィトマンが再登場し、自作を自演することで作曲と演奏を二重写しにする。

ベルリン古楽アカデミーも、26年3月にTOPPANの舞台に戻ってくる。二夜にわたる公演はバッハを中心に据えたもの。大作曲家の同時代人もいつしよに取り上げる演奏会は、2016年の「ヴェネツィアの休日」とも呼応する。

アンナ・プロハスカ（ソプラノ）の歌が聴けるのもうれしい。26年4月、ジョヴァンニ・アントニーニ率いるイル・ジャルディーノ・アルモニコとともに来日し、17・18世紀の歌劇からさまざまなアリアを紹介する。バロック期の語法を踏まえ切った先にある自由自在な音楽を、声楽・器楽の両面で示してくれよう。

TOPPANホールはこれからも「煙管ファン」が音楽愛好の“紫煙”を熏らせるのにふさわしい場所であり続ける。2025/26シーズンのラインナップを見れば、そう確信せざるを得ない。

さわたに・なつぎ／音楽評論家
慶應義塾大学文学部哲学科卒業、同大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了（いずれも音楽学）。〈柴田南雄音楽評論賞〉奨励賞および本賞受賞。著書に『音楽家65人の修行時代』ほか。国際ジャーナリスト連盟会員。

2025/2026シーズン主催公演ラインナップ



2025年
10/2 (木) 19:00、4 (土) 18:00、5 (日) 18:00
7 (火) 19:00、8 (水) 19:00
〈2025/26シーズンオーブニング 特別企画〉
TOPPANホール25周年 室内楽フェスティバル
フォーレ四重奏団とともに
アネット・ダッシュ（ソプラノ）／日下紗矢子（ヴァイオリン）／
ニルス・メンケマイヤー（ヴィオラ）／笹沼 樹（チェロ）／
石川 滋（コントラバス）
11/11 (火) 19:00、12 (水) 19:00、13 (木) 19:00
〈ハーゲン プロジェクト フィナーレ〉
ハーゲン・クアルテット
イェルク・ヴィトマン（クラリネット）＊第3夜のみ
[全5公演 Part 1]
11/15 (土) 13:00
イェルク・ヴィトマン（クラリネット）mit
青木尚佳（ヴァイオリン）& 笹沼 樹（チェロ）&
永野英樹（ピアノ）
12/4 (木) 19:00
ジャン＝クロード・ペヌティエ（ピアノ）
12/10 (水) 19:00
キリル・ゲルシュタイン（ピアノ）× 藤田真央（ピアノ）

2026年
1/7 (水) 19:00
TOPPANホール ニューイヤーコンサート 2026
1909年製ベーゼンドルファーとの邂逅
山根一仁（ヴァイオリン）／嘉田真木子（ソプラノ）／
川口成彦（ピアノ）／兼重稔宏（ピアノ）
2/9 (月) 19:00
ティル・フェルナー（ピアノ）mit
Trio Rizzle & 郷古 廉（ヴァイオリン）
毛利文香（ヴァイオリン）／田原綾子（ヴィオラ）／笹沼 樹（チェロ）
3/4 (水) 19:00、5 (木) 19:00
ベルリン古楽アカデミー
I ― Pure Bach
II ― Bach & Beyond
平崎真弓（ヴァイオリン、コンサートマスター）／
クセニア・レフラー（オーボエ）／ラファエル・アルパーマン（チェンバロ）
3/6 (金) 19:00
ゴートイエ・カプソン（チェロ）&
フランク・ブラレイ（ピアノ）
ベートーヴェン《チェロ・ソナタ》全曲
3/20 (金・祝) 18:00
北村 陽（チェロ）

4/4 (土) 18:00
アンナ・プロハスカ（ソプラノ） with
ジョヴァンニ・アントニーニ指揮
イル・ジャルディーノ・アルモニコ
5/12 (火) 19:00
レオンコロ弦楽四重奏団
5/26 (火) 19:00、29 (金) 18:30
ニコラ・アルトシュテット（チェロ） プロジェクト
第1夜― Duo
第2夜― マラソンコンサート
イリア・グリーンゴルツ（ヴァイオリン）／毛利文香（ヴァイオリン）／
原 麻理子（ヴィオラ）／ヨナス・アホネン（ピアノ）
6/10 (水) 19:00
トリオ・ヴァンダラー
7月初旬
〈ハーゲン プロジェクト フィナーレ〉
ハーゲン・クアルテット
[全5公演 Part 2]

※各公演の詳細はオフィシャルWEBサイトにてご確認ください。
2025年6月中旬現在

日時			公 演	
8／	5	(火) 19:00	クアルテット・インテグラ II	特別協賛：株式会社 竹中工務店
	2	(木) 19:00		
10／	4	(土) 18:00	〈2025/26 シーズンオープニング 特別企画〉 TOPPANホール25周年 室内楽フェスティバル フォーレ四重奏団とともに アネッテ・ダッシュ (ソプラノ)／日下紗矢子 (ヴァイオリン) ニルス・メンケマイヤー (ヴィオラ)／笹沼 樹 (チェロ) 石川 滋 (コントラバス)	
	5	(日) 18:00		
	7	(火) 19:00		
	8	(水) 19:00		
11／	11	(火) 19:00	〈ハーゲン プロジェクト フィナーレ〉 ハーゲン・クアルテット イェルク・ヴィトマン (クラリネット) *第3夜のみ [全5公演 Part 1]	特別協賛：鹿島建設株式会社
	12	(水) 19:00		
	13	(木) 19:00		

日時		公 演	
11／	15	(土) 13:00	イェルク・ヴィトマン(クラリネット) mit 青木尚佳(ヴァイオリン)&笹沼 樹(チェロ)&永野英樹(ピアノ) 特別協賛：株式会社 竹中工務店
	4	(木) 19:00	ジャン＝クロード・ベヌティエ(ピアノ) 特別協賛：株式会社 安藤・間
12／	10	(水) 19:00	キリル・ゲルシュタイン(ピアノ)×藤田真央(ピアノ) 特別協賛：高砂熱学工業株式会社
	〈ランチタイムコンサート〉 TOPPANホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート [全席指定]		
8／	8	(金) 12:15	Vol.135 戸澤采紀(ヴァイオリン) 愛のカタチ
11／	19	(水) 12:15	Vol.136 1909年製ベーゼンドルファーの息吹 I 石田成香(ピアノ) ウィーン古典派の波動―守破離
※開場は開演の30分前となります。 ※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービス[要予約・有料]をご利用いただけます。 ご利用の詳細については、各公演チラシをご確認ください。			

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます

www.toppanhall.com

INFORMATION



- A ベルチャ・クアルテット&エペーヌ弦楽四重奏団 (2025.3.28)
B ベルチャ・クアルテット (2025.3.27)
C エペーヌ弦楽四重奏団 (2025.3.26)
D フライブルク・バロック・オーケストラ&クリスティアン・ベザイデンホウト (2025.4.3&5)

期待の新星、初登場！



2024/25 シーズンを締めくくる8月の〈ランチタイムコンサート〉は、音楽一家のサラブレッド、戸澤采紀が登場。デビューCDが『レコード芸術』誌で特選盤に選ばれたほか、第85回日本音楽コンクール最年少優勝はじめ数々の国際コンクールで優勝、入賞の実績を持つ俊才です。主催公演でお馴染みのダニエル・ゼベックのもとで音楽を磨き上げた戸澤は、若手ながらも成熟した感性と卓越したテクニックで多くの聴衆を魅了してやみません。現在、ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー、ベルリン芸術大学にて研鑽中の彼女が今回、〈ランチタイムコンサート〉のコンセプトである「音楽家人生をかける一本勝負」に真っ向から挑み、マーラーを核とする知的好奇心をくすぐる意欲的なプログラムを聴かせます。ヴァイオリン・リサイタルでマーラーを軸に展開するのは異例のこと。戸澤の並々ならぬ意気込みと音楽的センスが感じられる公演となるに違いありません。どうぞご期待ください。

〈ランチタイムコンサート Vol.135〉
戸澤采紀(ヴァイオリン) 愛のカタチ
2025年8月8日(金) 12:15
北端祥人(ピアノ)

マーラー(ヴィッテンベッヒャー編):
交響曲第5番 嬰ハ短調より〈アダージェット〉
ブラームス:ヴァイオリン・ソナタ第2番 イ長調 Op.100
ビーバー:《ロザリオのソナタ》より 第16曲〈パッサカリア〉
マーラー:《リュッケルトの詩による5つの歌曲》より
〈私はこの世に捨てられて〉

入場無料(要予約/お一人様2席まで)
受付期間:2025/6/20(金)～7/18(金)
お申し込み方法:ハガキ(抽選制・当選者のみ通知)
〒112-0005 東京都文京区水道1-3-3
TOPPANホールチケットセンター「ランチタイムコンサート Vol.135」受付係
(住所、氏名(フリガナ)、電話番号、希望席数を明記ください。)

表紙:フォーレ四重奏団

コロナ禍での入国制限措置直前、奇跡的な来日となった2021年12月の公演より。全身から音楽を迸らせ、歓びと幸福で満たしてくれるフォーレQは今年結成30周年。赤のワンポイントカラーがオシャレなドレスコードは、メンバーの強い絆を感じさせます。フレンプリングさんは楽器で見えませんが、ポケットチーフにアクセントを。ほかのメンバーは…、見つけれましたか？

Review

世界屈指の凄腕に熱狂した濃密なひととき

鈴木淳史

TOPPANホールならではのというべきか、桜の季節にふさわしい、華やかな2つの大きな企画が行われた。

まずは、エペーヌ弦楽四重奏団とベルチャ・クアルテットによる、世界を代表する弦楽四重奏団の競演だ。3月26日には、エペーヌ弦楽四重奏団が、明晰かつキレキレのベートーヴェンとブリテンを演奏。とわりけ、ベートーヴェンの大フーガでは、各声部が切っ先も鋭く空間を突き刺し、峻厳ながら情熱的なフィナーレを導いた。翌27日はベルチャ・クアルテットだ。完熟ロマン派の香りを引き出したシェーンベルクの第1番。ベートーヴェンの第14番は、声部を柔らかに絡め合ってユーモラスなまでにフレーズを受け渡す。

最終日の28日は、この2組が合体して2つの弦楽八重奏曲を演奏。トナメントを勝ち上がった本命同士によるワールドカップ決勝を思わせるきらびやかさだ。メンデルスゾーン作品ではエペーヌのメンバーがリード。俊敏、快速、さらに華麗にバスを回しまくった。エネスク作品は、ベルチャがファースト・ヴァイオリンを担当。民族音楽を思わせるような濃厚な歌謡、音色も瞬時に移ろい、音楽は波となって大きくうねる。

そして月が明け、4月には古楽のベスト・コンビが登場。フライブルク・バロック・オーケストラとフォルテピアノ奏者クリスティアン・ベザイデンホウトが共演する演奏会が2夜にわたって行われた。

第1夜となる3日。コンサートマスターのフォン・デア・ゴルトツの

リードで、モーツァルトのオペラ《偽の女庭師》序曲、ハイドンの交響曲第74番をアタックで繋いで演奏。爽快なテンポのなか、曲に込められた多様なアイディアを雄弁に示す。そして、それぞれのフレーズがシャープに縁取られたヨハン・クリスティアン・バッハのト短調の交響曲。まさに疾風怒涛そのものといった運びだ。2曲のモーツァルトのピアノ協奏曲では、ベザイデンホウトがアントン・ワルター・モデルを弾く。第17番では、ピアノがオーケストラのなかに埋もれがちだったが、第9番ではバランスを整え、豊饒なオーケストラの響きのなかに凍としたフォルテピアノが詩情豊かに駆け抜けていく。

5日の第2夜では、モーツァルトの交響曲第29番からスタート。南ドイツらしい明るい音色で、きめ細やかな表現。極度に引き締まっても、調和しすぎてもいない。指揮者なしという特徴を生かし、その場で作り出されるアンサンブルの親密さが、モーツァルトの交響曲でも発揮されるのがいい(フライブルクという街がもつりべらさがそのまま表れているかのよう)。その親密さは、ベザイデンホウトとの共演でも同様。フォルテピアノの子音がガット弦の響きと重なり、母音は木管と溶け合う。この日演奏されたイ長調のロンド、そして協奏曲第13番でも、ニュアンスも豊かに持ち前の音色を華やかせたのだった。

(すずき・あつふみ/音楽評論家)

名手による極上の室内楽「読響アンサンブル・シリーズ」

読売日本交響楽団の名手が極上の室内楽を奏でる人気企画「読響アンサンブル・シリーズ」。TOPPANホールでの開催は、今回で4シーズンめ。毎回熱心なお客さまが詰めかけ、名演の数々に心震わせる貴重なひとときとなっています。今シーズンは、TOPPANホール主催公演で確かな軌跡を刻んできた鈴木優人、北村朋幹、日下紗矢子、そして上岡敏之―4人のリーダーによる全4回を予定しています。

7月の鈴木優人プロデュース公演では、マーラー(シェーンベルク＝リーン編曲)の《大地の歌》室内楽版をお贈りします。TOPPANホール主催公演やレコーディングでも、ホールの空間を知り尽くしている鈴木が繰り広げるアンサンブルに、どうぞご期待ください。

また、好評となっている出演者によるプレ・トークも開演前に行います。コンサートとあわせてぜひお楽しみください。

多彩なリーダーたちを中心に読響メンバーが躍動する白熱のアンサンブルを、408席の特等席でご堪能ください。

第46回《鈴木優人プロデュース》

2025年7月16日(水) 19:30
マーラー(シェーンベルク＝リーン編):大地の歌

第47回《北村朋幹プロデュース》

2025年10月15日(水) 19:30
藤倉 大:シークレット・フォレスト ほか

第48回《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》

2025年12月22日(月) 19:30
ストラヴィンスキー:「ブルチネルラ」組曲 ほか

第49回《上岡敏之と読響メンバーによる室内楽》

2026年2月26日(木) 19:30
エネスク:ピアノ五重奏曲 Op.29 ほか

(各日)全席指定:5,000円 ※開演前にプレ・トークあり

主催:読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
お問い合わせ:読響チケットセンター 0570-00-4390

編集後記

今号では、開館25周年の節目を迎えるにあたり、中村孝義様、片山杜秀様、澤谷夏樹様より大変充実したご寄稿を賜りました。ここに至るまで、幾多の心震える瞬間をみなさまと一緒できたことは私たちの大きな喜びであり、誇りでもあります。ちなみに四半世紀とは長

い歲月のようですが、TOPPANホールで最初に行われたTOPPANグループの入社式に参加した私にとっては、ほんの一瞬の出来事に思えるのが不思議です…。これからも、みなさまと一緒にTOPPANホールの新しい歴史を紡いでいけたらと心から願っています。(ゆ)